

# 冒険教育プログラムを通した大学生の自己の捉え方の変容

都合 美帆 (生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)

指導教員 黒澤 毅

キーワード：冒険教育プログラム 大学生 自己の捉え方

## 1. 序論

近年、学校や自治体、各スポーツ・文化・少年団体などは学校週5日制に伴い、生活体験、自然体験、社会体験などの体験活動に力を注ぎ充実を図っている。特に自然体験は、他の体験活動では得られない良さを兼ね備えており、その中でも冒険的な要素を含む活動である冒険教育が取り上げられている。冒険教育は新しい人間関係から生じるストレス、困難な活動や未知の自然環境の中にいることなどから生じるストレスで自己を見つめ直し、自己の可能性を再評価し再発見する機会を持つ<sup>3)</sup>と考えられている。

そこで本研究では、冒険教育プログラムを通した大学生の自己の捉え方の変容を明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究方法

【被検者】B大学で野外スポーツを専攻する3・4年生、計28名。

【検査時期】2010年9月16日～22日(泊7日)に行われたB大学の専門実習。主なプログラム概要を表1に示した。

表1 プログラム概要

1日目(9月16日)	縦走登山	5日目(9月20日)	日本海カヤック
2日目(9月17日)	縦走登山	6日目(9月21日)	オーバーナイトハイク
3日目(9月18日)	40Kmハイク	7日目(9月22日)	
4日目(9月19日)	日本海カヤック		

### 【検査方法】

①自己成長性調査：自己概念を測定するため梶田<sup>2)</sup>が作成した自己成長性調査(4因子31項目)を、実習1ヶ月前(pre1)、実習前日(pre2)、実習最終日(pos t1)、実習1ヶ月後(post2)の計4回、28名に実施した。

②インタビュー調査：調査対象者(Informant:情報提供者：以下Inf.)を各グループ男女1名、計10名を無作為に抽出した。インタビューは30分～50分程度(1対1形式)の半構造化インタビューにより、pre1、post2に実施した。インタビューによって得られた発話内容はGTA(グラウンデッド・セオリー・アプローチ)に基づき、データを切片化、コード化、カテゴリー化し、「各Inf.における自己の捉え方のプロセスモデル」を導き出し、カテゴリーの比較、修正、検討によって精緻化し、「冒険教育プログラムを通した大学生の自己成長モデル」の概念図を作成した。

③ふりかえりシート：筆者が独自に作成したものを使用し、毎日の活動終了後に実施した。

## 3. 結果と考察

①各調査時期における自己概念の因子別の平均と標

準偏差及び分散分析(Wilcoxonの符号付順位検定)

結果を表2に示した。

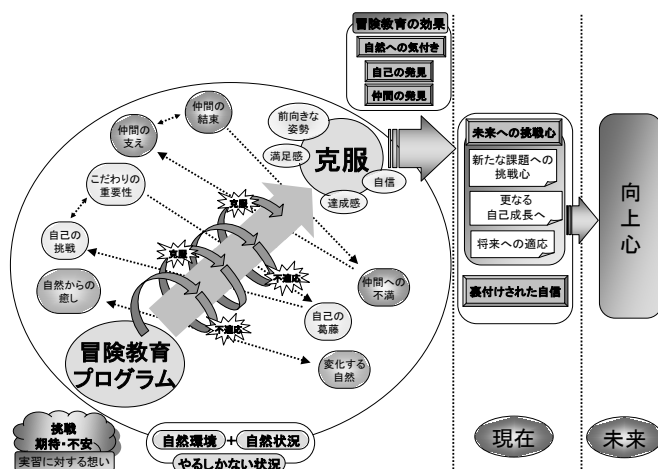
表2 自己概念得点の平均と標準偏差及び分散分析(Wilcoxonの符号付順位検定)結果

因子名	n	pre1	pre2	post1	post2	X <sup>2</sup>
M(SD)						
達成動機	28	31.04 (3.605)	31.07 (3.691)	31.43 (3.706)	31.46 (3.574)	-
努力主義	28	31.96 (3.437)	32.32 (2.776)	33.82 (3.432)	33.11 (3.604)	11.355 **
自信と自己受容	28	22.00 (3.006)	20.61 (3.833)	22.68 (5.099)	22.29 (4.721)	7.388 †
他者のまなざしの意識	28	26.25 (4.750)	26.75 (5.841)	25.89 (6.057)	25.86 (5.140)	-

†.05<p<.10,\*\*p<.01

その結果、努力主義因子で有意な向上が見られた。その原因として、過酷なプログラムが続く中で、自己の目標設定を行い、それに向かって挑戦し、そこで成功体験が得られたことや克服したことによる影響が大きいと考えられる。

②インタビュー調査の結果では、Inf.10人から『実習への不安・期待』→『うまく適応できない状況に陥る』→『様々な働きかけによって不安を克服し』→『自然・仲間・自己の発見をすることで今後の成長へとつながる』→『実習の意味をもう一度捉え直し』→『やればできるという自信を獲得』→『日常



のあらゆる場面で向上心をもっていきたい』という語りの特徴が見られた。概念図を図1に示した。

図1 冒険教育プログラムを通した大学生の自己成長モデル

## 4. まとめ

やるしかない自然環境の中での冒険活動は、直面する課題に対し、変化する自然、自己の葛藤や仲間との不調和など様々な不適応を経験する。しかし自分でこだわりを持つことや、「やればできる」という前向きな姿勢、仲間と挑戦する意欲を持つことで克服することが出来る。その結果、現在から未来にかけての新たな課題の発見とそれに取り組む姿勢を持ち、自己を更に高めるために、常に向上心を持って日常生活の中で過ごしていく気持ちを獲得していくことが分かった。

## 5. 参考文献

- 1) Anselm Strauss・Juliet Corbin (訳：操 華子、森岡 崇) (1999)：質的研究の基礎ーグラウンデッド・セオリー開発の技法と手順ー第2版。医学書院。p1-22
- 2) 梶田 龍一(1988)：自己意識の心理学ー第2版ー，東京学芸出版社
- 3) 日本野外教育研究会(1999)：改訂キャンパステキスト，杏林書院。p20